

又誤謬を有するもの多きかを知るに足るべし *Sine-usu* 碑文の示す所に従へば、磨延賈は大なる征戰を了る毎に、殆ど常として其の功を石に勒して後昆に傳へたるを知る、此の事は獨り此の可汗の時のみに非ずして、保義可汗の紀功碑の *Kara Balgassun* に存するに鑑み、又突厥可汗の紀功碑の諸方に存する例より考ふるも、必ず歴代の可汗の間に行はれたる常例なりしなるべし、今より後斯る史料が漸次發見せられ、漢史によりて茲に論述を試みたる所を補正し得る日の近からんことを希望して、此の稿を了らんとす。

註〔一〕 *Die chinesische Inschrift auf dem uigurischen Denkmal in Kara Balgassun. 1896.*

〔二〕 *Chronologischer Abriss der Geschichte der Uiguren.*

〔三〕 此の次第を記せる舊唐書の記事は、全く隋書鐵勒傳を轉載したるものにして、少くとも回鶻の傳として適當のものに非ることは、第二篇の劈頭に於て述ぶるが如し。

〔四〕 *Hirth* 氏は *Nachworte zur Inschrift d. Tonjukuk, S. 112* に於て、新唐書の時健は舊唐書には特健と見ゆとし、特健は *Tägin?* と疑を存したれど、何れが正しきかを曰はず、*Chavannes* 氏も舊唐書迴紇傳の一節を譯したる中に、特健は新書には時健と見ゆるを注意したるに止れり (*Tou-kiue occidentaux, Index. p. 367, a*)、唐代音譯の例によれば、特は *ts* を、時は *di, ji* を寫すに用ゐらるれば、此等の兩者中の一方は必ず誤なるべけれど、原との語の明かならざる以上、其の何れを正しと定め得べきにあらず、此の名は當時の北方人の名としては屢々現はれ、兩唐書契苾何力傳には處蜜の時健俟斤といふもの記され、新唐書薛延陀傳には阿史那時健の名見え、通鑑も之を阿史惠時健と記せり、又新唐書回鶻傳に、太宗が時健俟斤の它部を祁連州と爲せしこと見え、通鑑も之を阿史德時健俟斤部落と記せるに、新唐書地理志には反りて阿史德特健部とせり、此の如く特健、時健の兩形は當時の史書に錯雜して現はれ、其の正否を判別し難し、こゝには暫く舊書及び會要に見ゆる形を採録せり。